

あびの文化

発行人
藤井 吉彌
我孫子市寿
2-21-23
04(7185)
1996

プロジェクト報告会&懇親会を 開催します

- 日時 十月十二日(日)午後1時半〜4時半
- 会場 我孫子北近隣センター並木本館ホール
- 参加費 1500円(飲み物、茶菓・つまみ付き)

昨年に続き今年もプロジェクト報告会を開催します。活動中の各プロジェクトの進捗・内容の報告は勿論ですが今回も会員同士の懇親・親睦を重視した運営を考えていますので、新しく会員になられた方、今まで参加できなかった方も是非お越し下さい。

第二回「あびの市民活動メッセ」に参加

8月20日(水)と21日(木)の両日、けやきプラザの2Fふれあいホール・ギヤラリーで「我孫子市民活動メッセ」が開催された。このメッセは今回が初の開催で、64団体が参加した。我孫子の文化を守る会も「杉山英と血闘守之助の師弟愛」をテーマに、パネル展示をした。初日夜のレセプションで挨拶した星野市長は「参加団体の皆さんと一緒にこの我孫子をより住みやすく若い世代が安心して子育てできるような町にしましょう」と呼びかけた。

手賀沼アート・ウオーク終了

8月7日から12日の期間で開催されていた「手賀沼アート・ウオーク」が予定通り終了した。同展は柏市と我孫子市の共同開催であり、入場者は柏第一会場(市民ギャラリー)2,021名、同第二会場(柏高島屋)4,486名、一方の我孫子会場(我孫子市民プラザ)1,110名の合計7,617名であった。当会も期間中にスタッフを派遣し協力した。

我孫子市では「手賀沼と民藝の心展」のサブタイトル

ルが付され、河井寛次郎、河村晴山、富本憲吉、濱田庄司、バーナードリーチなどの作品をはじめ、現在も活躍されている作家の作品も展示された。普段目に触れることができないような貴重な作品が展示されていたにも拘らず結果的には入場者が少なかつたのは残念であった。

「飯泉喜雄顕彰碑建設10周年記念文化講演会 講演録」を我孫子市民図書館に寄贈

昨年当会で作成した「飯泉喜雄顕彰碑…講演録」3冊を我孫子市民図書館に寄贈した。同図書館から「我孫子市の歴史書として貴重な資料である」との評価を得ている。

三河戸田氏の古里を訪ねる

戸田 七支

六月末のことであろうか、当会会員の井上千鶴子氏より、「戸田氏の古里田原へ行きませんか？」と声がかかった。正直なところ我が家の祖先と田原と深い関係があるとは考えていなかった。同行者編成過程で、越岡副会長に相談したところ、「大垣へも寄りませんか？」と言ったことになった。小生豊橋の生まれで、田原こそ高校生のころ、野球の試合で数回遠征したことがあるくらいで、それももう六十年も前のことだ。大垣にいたつては一度も訪れたことがない。旅のデザインに少々の時間を要した。

発案者の井上千鶴子氏は井上家の祖先が江戸へ出て来たキツカケは大垣城主戸田氏鉄が任地へ赴任するに従い江戸へ下ったという言い伝えを持っていた。そして戸田氏の祖先を訪ねるには先ず田原であると。今回田原と大垣の両市を訪れるという企画は誠に当を得たものでした。

参加メンバーは越岡、戸田、斉藤、井上、山口の五氏と豊橋から小生の実兄と地元成章高校の教諭をしていた芳賀フサ子氏の、総勢七名(東三河の歴史を語

る会でした。八月二十六日、残暑厳しい中を一路田原へと向かった。

田原城は一四八〇年(?)初代戸田宗光により築城された。いろいろ変遷があったが、戸田氏は十一代にわたつて城主を務めた。戸田氏発祥の地と言えるであろう。現在のお城は近代になって改築されたもので、田原市博物館となつており、展示品は殆どが渡辺崋山に関するもので、戸田氏一族にとっては不満が残る。次に戸田氏の菩提寺である長興寺を訪れた。田原城より車で十二分、田原の郊外、閑静なところにある。歴代城主十一名のお墓が整然と並んでいた。戸田家の源流がここから始まったと思つと感慨深いものがある。観光として訪れる人はなく、深い杉木立のなか、全てが静まりかえつていた。南無阿弥陀仏……

その夜は渥美半島の突端にある伊良湖ビューホテルに泊まった。屋上の露天風呂より見る神島の灯、時の流れを忘れてしまふ。

恋路ヶ浜も歩いてみたが、椰子の実が漂着していなかったのは言うまでもない。

翌二十七日、豊橋より大垣へ向かった。事前に訪問の目的を伝える際、我孫子の文化を守る会の戸田と話したところ、「戸田様の末裔の方ですか？」と尋ねるものだから、「そうです」と言つてしまったので先方の少々受け入れ方が違つていたようだ。先ずは大垣戸田氏の菩提寺である円通寺を訪れた。早速ご住職に庫裡に招かれ茶菓子のもてなしを受けた。徳川幕府成立後、初代藩主戸田氏鉄から歴代の藩主を祀つており、節目節目の法会で重要な役割を果たしてきた。

次に常葉(ときば)神社を訪れた。歴代の藩主を神として祀る処で、大垣の中核となる神社と言えよう。ここでも社務所にあがり、丁寧なもてなしを受けた。最後に大垣城に上つた。慶長五年関ヶ原の合戦の拠点となつたところだ。

天守閣から遙かに古戦場が望まれた。城内は歴代藩主の資料がところ狭しと陳列されていた。幕末大垣藩は徳川幕府軍の先鋒として鳥羽伏見の戦いに奮戦したものの、一敗地に敗れたが、家老小原鉄心の言を

いれ、官軍側に転じた。このことが会津のような混乱を招くことなく幕末を乗り切った。戸田氏鉄から十一代にわたって戸田氏が藩主を務めた大垣は城下町として情緒あふれる街となつて現在にいたつている。最後の藩主戸田氏共(うじたか)公は伯爵に叙せられ、昭和十一年に没するまで市民に尊敬された。戸田氏最後の太輪の花でした。大垣では言葉の端はしに「戸田様、戸田様」の声があり、いたる処に九曜紋の紋所が目に入る。戸田氏の末裔のその先に連なる者として、こんな嬉しいことはない。

旅する巨人 宮本常一

折原 淳二

宮本常一没後二十年の平成十二年、一月から三月まで、NHK人間講座「宮本常一が見た日本」(解説者は佐野真一)が放映された。深く感銘を受けたことを覚えている。

宮本常一は明治四十年、山口県周防大島の農家に生まれた。生家は善根宿でもあった。

明治四十年、民俗学者の南方熊楠は、四十才、柳田国男が三十二才、折口信夫、二十才、渋沢敬三は、十才。

宮本常一と渋沢敬三「旅する巨人」(佐野真一著)から抜粋する

宮本常一は、今日の民俗学の水準からは想像もできないような巨大な足跡を、日本列島のすみずみまで印した民俗学者だった。その徹底した民俗調査の旅は、一日当たり四十キロ、延べ日数にして四千日に及んだ。

宮本は七十三年の生涯に合計十六万キロ、地球を丁度4周する。気の遠くなるような工程をズック靴をはき、よごれたリックサックの負い革にコウモリ傘をつり下げて、ただひたすら、自分の足だけで歩きつづけた。泊めてもらった民家は千軒を超えた。宮本の恩師の渋沢敬三は、日本列島の地図の上に、宮本君の足跡を赤インクでたらしめていくと、日本列島は真っ赤になる、と評した。

口承文芸からはじまった宮本の関心は、生活史、民俗学、農業技術から農村経済、はては塩業史、漁業史、民族学、考古学、日本文化論に至るまで果てしなく広がっていった。柳田国男以降、おそらく最大といつていい業績をあげながら、宮本はわが国の民俗学徒の間で、皮肉にも、彼の代表的著作と同じ「忘れられた日本人」と同然の立場に置かれつづけた。宮本の故郷、周防大島東和町(現周防大島町)には記念館一つなく、宮本を知る人もほとんどいかなかった。

宮本を高く評価した司馬遼太郎は、岩波文庫の「私の三冊」というアンケートの中で、「忘れられた日本人」をあげ

「宮本さんは、地面を空気のように動きながら、歩いて、歩き去りました。日本の人と山河をこの人ほど確かな目で見た人は少ないと思います」と評している。

宮本常一は自著で次のように記している。

東京へ出てきて渋沢敬三に言われたことは、「学者になるな、よい調査者になれ」ということであつた。縁の下力持ちのようなもので、一生貧乏するであろうが、その覚悟でないと挫折するといわれた。そのときフト私は鍋釜下げて苦勞する妻の姿が頭に浮かんだ。と同時に今まで接してきた多くの貧しい人たちの顔が浮かんだ。

貧しいけれども勤勉で善良で、ときには頑固でずるいこともあるが、とにかく精いっぱい生き、しかも平凡に死んでいく人たちである。がその人たちにも歴史がある。一人一人の歴史があるばかりでなく、民衆そのものの歴史がある。それはまた本当に発掘されてない。しかもその人たちによって文化は発展してきたのである。武士が戦闘に明け暮れしているときも、百姓は農業を続けてきた。宮廷の文化の栄えたときも、食料からいろいろな材料まで、すべて供給したのは農民たちであつた。農民たちは自分自身の生活を守るための組織を作り、なお支配者に支配者の文化をつくるためのあらゆる素材や技術を提供してきた。その姿だけは、何としても明らかにしておかねばならぬと思つた。私のような理論的でない人間は、書物を読んだだけでは納得がいけないことが非常に多いし、文字を通して

て歴史を理解しようとする少しも実感がわいてこない。書物というのは不便なもので、書いてある以外のことはわからない。实地調査というものは、すべてのものを見ることができ、聞くことができる。それによつて正しい実感も得られる。そのため、实地調査は民俗学のような学問には是非とも必要な条件の一つであり、歩くことにしたのである。

宮本は、日本各地を広く調査し、主に離島や山村に暮らす人々、定住しない人々など、表たつて語られることもなかった庶民の生き方を研究した。柳田国男の水田稲作農民中心の視点と対比された。

宮本は「瀬戸内海の研究」で博士号を取得。武蔵野美術大学教授、日本観光文化研究所初代所長などをつとめた。宮本常一著作集全五十巻がある。

(プロジェクト報告)

我孫子市の巨木・名木を訪ねる会

佐々木 侑

日時 9月10日(水)9時～11時半

場所 けやきプラザ 1階・工作室

出席者 11名

テーマ 「巨木の会の在り方について」：検討会」

討論内容

1、探索調査は今後も継続して毎月実施する。原則、毎月第二水曜日指定場所に集合。

*従来の調査で、歴史と文化のある神社仏閣等の「鎮守の森」に巨木は多く、樹木を調べることにより歴史と文化の一格に触れることが出来て、我孫子に愛着を感じた。

*個人所有地の巨木にもその地域の深い歴史があつた。

*公園・学校・その他施設にも夫々の理由のある樹木があり、それなりの歴史と理由があつた。

2、一定時期に「取り纏めの冊子」を作成し、希望者に配布する。

*冊子は地区ごとに纏め、パソコンで作成A4用紙の袋とし、1ページ樹木1本ごと、約20本で1冊。

*費用は用紙代、プリンターインク代(印刷代)、印刷機使用代、

*原稿内容・構成は①樹木のデータ、②樹木のある区域(神社)の歴史、③文学的所縁、④樹木に関する言伝え、⑤樹木の特徴・用途用材、⑥当該樹木の写真(夏と冬)

*費用回収は1冊100円の協力金

*協力組織?への無料配付・・我孫子市・商工会・神社寺院・地元商店会・地元企業・教育施設など

*冊子作製には役割分担をする。

3、組織作り 会員の義務と責任(自発的参加と協力出来ることを協力する、負担とならないこと、全員役員の意識)

*樹木に詳しい専門家に協力をお願いする。当会には樹木に詳しい湯本氏・小島氏がいます。(我孫子ガイドクラブの佐久間氏と吉澤さんがコンタクト)

(市役所関連部署には斉藤さんがコンタクト)

4、地図(の樹木所在標記)

*「我孫子の景観を育てる会」で使用している地図(さくらマップ)を吉澤さん通じて譲り受けを検討する。

5、「我孫子の巨木」会員の募集が必要である。

*関連する団体と協賛し、樹木に興味を持つ人を会員に引入れる。

*第1号、「巨木名木冊子」を年内に発行し会員増加のツールにする。

6、機動力を高めるため場所によつてはマイカーを使用する。

次回予定

10月8日(水)は天王台駅北口に9時集合、車両3台用意(雨天順延)

佐々木車、牧田車、梨本車

調査ルート:天王台駅北口出発 9:00→無量寺 9:15

↓八幡神社 9:30→西音寺 10:00→下ヶ戸八幡社 10:30

↓下ヶ戸個人邸 10:30→高野山最勝寺 11:00→高野山

個人宅 11:30→高野山ガスト 12:00(昼食)→解散

百人一首を楽しむ会

美崎 大洋

恋の歌(7,8)

名にし負はば逢坂山の さねかつら 人に知られでくるよしもがな

【現代語訳】 恋しい人に逢える「逢坂山」、一緒にひと夜を過ごせる「小寝葛(さねかずら)」その名前にそむかないならば、逢坂山のさねかずらをたぐり寄せようように、誰にも知られずあなたを連れ出す方法があればいいのに。

みかの原わきてなかるゝ和泉川 いつみきとてか恋しかるらん

【現代語訳】みかの原から湧き出て、原を二分するように流れる泉川ではないが、いつか逢うたといつて、こんなに恋しいのだろうか。(一度も逢ったことがないのに)

有明の つれなく見えし 別れより 晝ばかり 憂きものはなし

【現代語訳】 夜明け前の有明の月が西の空に残っている。もうすぐ夜明けだ。有明の月は冷ややかでそつげなく見えた。相手の女にも冷たく帰りをせかされた。その時から私には夜明け前の暁ほど憂鬱で辛く感じる時はないのだ。

浅茅生(あさぢぶ)の 小野の篠原 しのぶれど あまりてなごか 人の恋しき

【現代語訳】まばらに茅(ちがや)が生える、篠竹の茂る野原の「しのぶ」ではないけれども、人に隠して忍んでいても、想いがあふれて「ほれそつになる。どうしてあの人のことが恋しいのだろう。

今月の雑学

回文(上から読んで下から読んで同じ文、但し濁点は無視するなどのきまりがある)

とまと、小箱、逆さ、田植え唄、西か東に八百屋、 焼接屋(やまきぎや)、 留守になにする

いかにもにがい、私まけましたわ

内閣退(の)くかいな、関係ない喧嘩(けんか)、飯にお煮しめ 良き月夜

竹藪焼けた(タケヤブヤケタ)

確かに貸した(タシカニカシタ)

新聞紙(シンブンシ)、嫁よ新聞紙読めよ、

嫁や新聞紙止めよ

マカオのおかま、アニマルマニア

夏まで待つな(ナツマデマツナ)

新幹線沿線監視(シンカンセンエンセンカンシ)

預金いくらや楽隠居(ヨキンイクラヤラクインキヨ)

イカのダンスは済んだのかい

軽い機敏な仔猫何匹いるか

(かるいきびんなこねこなんびきいるか)

でかいお尻が好きと帯を解きすがりしをいかに

キヤバレーから帰れば妬き

(きやばれえからかえればやく)

白波の高きを(音)すらなかなかはかならず遠き方の

みならし

(しらなみのたかきをとすらなかなかはかならずと

をきかたのみならし)

茂る葉もかざしていはいはまやみくだく深山はいでし坂も

遙けし

(しげるはもかざしていはいはまやみくだくみやまはい

でしさもはるけし)

長き夜の野も遙かにてそまくらくま袖にかかるは物の

よきかな

(ながきよのものほるかにてそまくらくまそでにか

るはものよきかな)

長き世の 遠の眠りの 皆目覚め 波乗り船の 音の良

きかな

(ながきよのとのおのねぶりのみなめざめなみのりふ

ねのおとのよきかな)

むら草に草の名はもし備はらば何(な)ぞしも花の咲

くに咲くらむ

(むらくさにくさのなはもしそなはらばなぞしもは

なのさくにさくらむ)

今年度会費(二千円)納入のお願い

本会はひとえに会員皆様方の会費によって運営されています。郵便振替口座(00190-3-135476)『我孫子の文化を守る会 伊藤一男』宛お振込みください。

第114回史跡文学散歩(報告)

「柳田國男の住んだ布川を訪ねる」

越岡 禮子

6月29日柳田國男が住んだ布川を訪ねた。史跡文学散歩の今年のテーマは「文人旧居を訪ねる」ということで、布川は柳田がまだ十二歳頃住んだところだ。柳田の本姓は松岡、生まれは兵庫県福崎町ですが、家の都合で兄が布川に開業した医院に二年ほど引き取られたのです。布川では國男がのちに農政学を学んだり、民俗学をおこす原点となるいくつかの体験をします。祠の中にあつた玉を見て異常体験をしたり、「間引き絵馬」を見て農民は何故貧しいのかと悩み、まだイナサと呼ばれる風に故郷と違った風土を知ったこと、『利根川凶志』と呼ばれる博学誌に大変興味を持ったこと、これらが少年柳田國男が布川の家で体験したことでした。ゆかりの徳満寺、赤松宗旦旧居と墓所、来見寺、旧居があつた柳田國男記念公苑などを約二十名の参加で訪ねました。徳満寺では数日後の祭礼に備えて大きな藁の龍を制作中でした。朝七時頃まで大雨で実施が危ぶまれましたが午後の良い天気。楽しい一日でした。



(写真は徳満寺の間引き絵馬)

第115回史跡文学散歩(報告)

「千駄木周辺の文人旧居を訪ねる」

牧田 宏恭

快適に過ごせる季節となり、本日9月21日(日)も早朝はこの秋一番の少々寒ささえ感じられる晴天でスタートを切った。本日の史跡文学散歩は表題にもある、文人旧居の多い千駄木周辺の散歩である。

我孫子駅に総勢22名(会員7名、非会員15名)、内女性参加者は14名と、男性陣を大幅に上回り、文学史跡への女性の興味の大きさを物語っている。本日の講師「リーダー」も、引き続き、当会副会長の越岡禮子氏が担当され、一同、地下鉄の千駄木駅に午前10時に到着した。

駅から、地上に上がると、当地区は、本日図らずも根津神社の祭礼の最中で、お囃子の名調子が遠くに、近くに聞こえてくる。

お囃子を耳にしながらか、早速、最初の訪問地「須藤公園」に通ずる、緩やかな登りの続く「団子坂」へと向かった。

「団子坂」は食べ物の団子に纏わる謂れもあるようだが、別名「潮見坂」等々と呼ばれていたと、坂を上る途中に振り返って観れば、嘗て眺望を遮るような建物の無かつた時代には、海が視界に入る高台へと続く坂であつたとの説明が納得できた。

また、この坂上には本日の訪問先である、著名な文人の住居(跡・址)があつた地であり、菊人形が並んでいたことでも知られていたと、夏目漱石の小説「三四郎」にも、この坂に纏わる出来事が詳しく描かれている。との、当時の状況が眼に浮かんでくるような、越岡リーダーの詳しい「語り」があつた。

ほどなく、落ち着いた雰囲気の小道に入り、到着したのが「須藤公園」。ここは、古くは松平備後守の下屋敷のあつたところのこと。明治時代半ばに実業家である「須藤吉左衛門」の所有を経て東京市へ寄付され、現在の文京区へ移管された。決して広くは無い公園内には「くすのき」大木も多く、用水から落ちる滝(須藤の滝)もあつて、心の休まる空間である。

次に向かったのは「宮本(旧姓中条)百合子(旧名ユリ)ゆかりの地(千駄木5丁目)」である。「百合子」は皆さんご存じのとおり、プロレタリア作家であり、後に名高い共産党の宮本顕治と再婚、宮本姓となった人物だ。ゆかりの地の表示は「旧駒込林町」とあり、あずき色の門柱が僅かに残っていた。

続いて向かったのは、「高村光太郎旧居跡(千駄木5丁目)」である。高村光太郎はこの後、訪ねる彫刻家「高村光雲(遺宅)」の長男として生まれ、10歳の時この近くに住まいが移り、育てられた。その後「現東京芸大・彫刻科」を卒業、欧米留学中、「ロダン」に傾倒、また詩人としても活躍。明治45年にはこの旧居跡の地に居(アトリエ)を構え数々の作品彫刻・詩を生んだとのこと。また妻の智恵子をこよなく愛し、纏わる詩や、彫像も多く残しているようだ。

光太郎はロンドンに滞在時、わが「我孫子の地ゆかりの人物」でもある「バーナード・リーチ」と親交を深めるなど、美術・芸術の世界の著名な人物の研究等と交わりを深め、その関係から、「白樺派」文豪・文人・芸術家とのつながり(?)があつたようだ。

話は一寸、横道に逸れるが、私自身はそのような世界に疎く、且つ知識もあまり持ち合わせていないので、この機を生かし、遅ればせながら我孫子に関わる人物・その作品をより深く知り、しわの伸びきった脳に刺激を与えたいと思う。

次に、光太郎の父「高村光雲・その三男・豊周遺宅(千駄木5丁目)」に向かった。光雲は明治木彫界の中心的存在であり、豊周は鍔金芸術家とのこと。

続いて、作家「平塚らいてう」らが設立した「青鞜社発祥の地(千駄木5丁目)・旧駒込林町」を訪ねた。青鞜社発行の「青鞜」の創刊号(明治44年)の表紙は、のちに高村光太郎の妻になる「長沼ちる」が描いたのだそうだ。この「青鞜社」を構成する女流文学集団は婦人解放運動を起し、拠点平塚雷鳥(らいてう)の実家などとしたとのこと。

さて、時刻も午前11時を回り、気温も上がってきたため、一寸ばかり足に疲労が出てきたようだ。次の訪問先の「観潮楼跡(現森鷗外記念館)」に到着し、団



体入場扱いの入場券を購入。参加メンバーは、とりあえず、先に入館し鑑賞するなり、あるいは付近でまずは昼食をとるなりして、13時集合(記念館に)の自由行動にした。

「観潮楼」は、その呼び名のとおり、高台に位置して、森鷗外が没する(60歳)まで、居を構えていたところであつて、当時、品川方面の東京湾が見渡せる、絶好の場所であり、ここを文芸活動の拠点にして、数々の歴史小説を生み出すほか、「観潮楼歌会」なども行い、「与謝野鉄幹」、「石川啄木」などの詩人・文学者との集會も催したそうである。

先の震災にて消失した建物の跡には「鷗外記念図書館」などがあったとのことだが、つい最近、「森鷗外記念館」として甦ったばかりの今は、当時の面影を残す敷石・庭石とともに、震災にもめげずに残った銀杏の大木がある。記念館内には鷗外愛用の文具・原稿・書簡などが展示されていた。また、現在「特別展」として、「流行をつくる——三越と鷗外」が展示されていた。

「鷗外とその一家の三越との極めて深い係わり？」を強く感じた。鷗外記念館のボランティア説明員(女性)に引きとめられ、「長〜い、丁寧なる説明」もあつたので、予定を20分余り繰り下げ、13時25分記念館を後にし、森鷗外も好んで通つていた「敷下通り」を下つて、次の「夏目漱石旧居跡(向丘2丁目)へ向かつた。

「夏目漱石旧居跡」は現日本医大同窓会館敷地内に位置しており、ここにあつたという表示のほかもない。置物の「猫」が塀の上に飾られているだけである。漱石はこの地にて、雑誌「ホトトギス」に有名な「吾輩は猫である」、「倫敦塔」を投稿、さらには「坊っちゃん」「野分」等々を発表、作家「漱石」の名を不動なものにしたのである。鷗外もこの家に一時居住していたという。

本日の散歩もそろそろ、終盤に差ししかかつて、次に訪れたのが、本日祭礼の真つただ中の「根津神社(根津権現)」である。古くは千駄木町にあつて、(すさのおのみこと)を祀っている。

社のある現在地には、五代將軍綱吉により移されてきたとのこと。「権現造り」などが特徴で「国の重要文化財」の指定を受けている。「神輿三基・獅子二頭」「徳川家宣衣塚」、区内最古の「庚申塔」など、見ごたえのあるものがある。付近にある「権現坂(S字坂)」は森鷗外の小説にも登場することである。本日は、祭礼に因み、舞台では「舞が舞われていた。参拝者の行列は長蛇のごとく、大変な賑わいである。外人も散見された。さて、本日の散歩の締めくくりは、嘗て「水戸徳川家下屋敷」があつたところ(現東大農学部裏)にある、「サトウハチロー旧居跡(文京区弥生)」を訪ねた。ハチローに纏わるエピソード、そして、詩人としての波乱?に満ちた生涯の詳しい説明が、越岡リーダーからあつた。続いて、そのすぐ近くに立っている「弥生式土器発掘ゆかりの地」の石碑前で、締めのおいさつを交わし、14時30分、現地解散となった。

本日は、好天に恵まれ、全員最後までしつかり歩き、且つ越岡リーダーの丁寧で解りやすいご説明をいただき、私としても、大変中身が濃く、実りのある学習の一日であつた。

今後も、文化面、歴史面など、我孫子との繋がりを

見だせる散歩の企画に期待したい。

あびこだより 6号

ドイツ科学史巡礼の旅

— 明治時代の日本人留學生の足跡を訪ねる —

伊藤 一男

会社勤めを辞めたあと、大学時代の仲間とドイツ科学史巡礼の旅を始めてかれこれ十年になる。

今年六月にはベルリン、ライプツィヒおよびミュンヘンを訪ね、明治時代にはるばる日本からやつて来た留學生の幾人かの足跡を追った。

***長井長義(1845-1929) 薬学・化学の先駆者**

1871年(明治四年)、明治新政府の第一回国費留學生に選ばれ、ベルリン大学化学科のホフマン教授に師事。功績を認められて学位を授与され、十四年の永きに亘つて研究を続け、帰国後は東大教授に就任。テレーゼ夫人とともに女子教育にも力を入れた。

***北里柴三郎(1853-1931) 細菌学の父**

1885年(明治十八年)、ドイツ留学を命じられ、ベルリン大学コッホ教授に師事。破傷風菌の純粋培養に成功し、血清療法を確立した(共同研究者のペーリングがノーベル賞)。帰国後はわが国の医学・衛生学の発展に筆舌に尽くしがたい業績を残したが、それを可能にしたのは、終始一貫した生きざまと高い志、大勢の恩人の存在であつた。

***森 鷗外(1862-1922) 文豪、軍医総監**

1884年(明治十七年)、軍医として衛生学や衛生制度を学ぶためにドイツ留学。ライプツィヒを皮切りにドレスデン、ミュンヘンを回り、ベルリン大学では北里の紹介でコッホに師事。のちに北里/緒方を巡る脚氣論争に割つて入つてきたことは有名。ベルリンには鷗外記念館があるが、作家としての鷗外の作品や業績の紹介が主体。

***池田菊苗(1864-1936) 化学者・味の素の発明者**

東京帝国大学化学科の助教授の頃(1899年)、物

理化学研究のためライプツィヒ大学のオストワルド教授のもとに約一年半留学。その後、1901年ロンドンに滞在し、夏目漱石と親交を結ぶ。帰国後、東京帝国大学教授に昇進。酸甘塩苦の四基本味以外の味成分を「うま味」と名付け、昆布のうま味成分から「味の素」を発明した。

第116回史跡文学散歩のお知らせ

「林芙美子邸と上高田の寺町を訪ねる」

名女優、森光子が演じた林芙美子の『放浪記』の舞台そっくりの林芙美子邸を案内します。

林芙美子は長い漂泊の半生を過ごし、自宅を持つのが夢でした。その夢を叶えたのが下落合の家です。昭和元年、手塚緑敏と結婚後、長い放浪にピリオドを打ち、作家として果敢で旺盛な生活が始まりました。そして昭和十六年、三十七歳の時、待望の家を持ちますが、折しも戦時中、いろいろな規制の中、研究を重ね、名建築と評される家で名作、『浮雲』『めし』などが生まれました。紅葉の庭もお楽しみに・・・。

1. 日時 十一月三十日(日)9時集合(小雨決行)

JR「高田馬場駅」まで切符購入の上

我孫子駅改札口内に集合 3時頃現地解散

軽食持参願います

2. コース 中井駅ー林芙美子邸ー上高田寺町(林芙美子、歌川豊国、吉良上野介、笠森お仙、柳沢染子、新井白石などの墓所)

講師・ガイド 越岡禮子氏(当会副会長)

参加費 会員 無料、非会員 500円

申し込み TEL&FAX (七二八四)二〇四七

越岡まで (締め切り) 11月23日(日)

「そがそつー!我孫子のいろいろ八景 其の三」

募集締切・終了

我孫子の景観を育てる会が企画運営していた標記の募集(「桜の花のある風景」と「水のある風景」の2つのテーマ)については8月31日に締め切った。

楚人冠俳句「序跋詩歌集」より 杉村楚人冠

昭和六年冬

千鳥なくあらぬ方にさす六日月

紺足袋と白足袋と行く垣の外

霜よけの藁に霰(あられ)や冬椿

指多くば火鉢にかざしいとけなき

野は枯れてまんべんなく日のあたりけり

木鼠のあたり見まはず落ち葉かな

落葉搔いて顧れば又落葉かな

日だまりの山ふところや蜜柑島

水鳥の水に羽ばたく夕あかり

バルコンに花ほの見えて冬ごもり

*バルコン(フランス語)＝バルコニー

朝な朝な古傷痛み年暮るゝ

のし餅や日當りつよき心坐敷

冬ごもりよんどころなく雨を聴く

水仙に朱唐紙古き書経かな

今後の行事予定

□ 「放談くらぶ」

日時 10月4日(土) 14時～16時

会場 アビスタ第2学習室

講師 三谷 和夫氏(当会副会長)

演題 『相馬霊場八十八ヶ所物語(3)』

「歴史と文化をもう一度考えよう」

◎参加費 会員無料 非会員二〇〇円

□ 「放談くらぶ」

日時 12月7日(日) 14時～16時

会場 市民プラザ会議室1

講師 伊藤 一男氏

演題 『ドイツ科学史巡礼の旅』

「明治時代の日本人留学生の足跡を訪ねる」

◎参加費 会員無料 非会員二〇〇円

当会の最近の動き (報告、予定)

散歩部会

9月21日(日)第115回史跡文学散歩

「千駄木近辺の文人旧居を訪ねる」

11月30日(日)第116回史跡文学散歩

「林芙美子邸と上高田の寺町を訪ねる」

手賀沼部会

8月14日(木)美手連運営委員会

9月26日(金)美手連運営委員会

10月5日(日)美手連理事會

11月11日(火)研修会 林紀男氏による船田池、千葉城跡博物館見学など

研修部会

8月9日(土)放談くらぶ「インドを旅して」

講師 日比野理氏、伊藤克彦氏、横内照氏

10月4日(土)放談くらぶ「相馬霊場八十八ヶ所物語(3)」講師三谷和夫氏

12月7日(日)放談くらぶ「ドイツ科学史巡礼の旅」

「明治時代の日本人留学生の足跡を訪ねる」

講師 伊藤一男氏

杉山英部会

8月20日(水)、21日(木)市民活動メッセ出展

9月14日(日)久寺家まちづくり協議会において

「明治初期の我孫子小学校に見る師弟愛」講演

10月16日(木)白樺三木会において「杉山英先生の

紙芝居」実演(生涯学習出前講座)

次回役員会予定

日時 11月2日(日) 13時半～16時

(入会員紹介)次の方が入会されました。

鈴木淑子、稲葉義行(以上2名)

編集後記 「天災は忘れた頃にやってくる」

「青天の霹靂」の表現をまさに証明するような災害が続く。御嶽山の火山噴火は改めて自然の持つ大きなエネルギーを知ることになった。直前に小さく発生していた地震の情報は活用されなかった。今回、会員の方から文章を寄せて貰った。テーマは限りません。皆様も気楽にどうぞ。(美崎)